

WLAP応用科目「イスラム教の世界」実践報告

A Practical Report on “Islamic Worlds” in the World Liberal Arts Program at Nagoya University of Foreign Studies

松山洋平

Yohei MATSUYAMA

1. はじめに

2016年度以降、Ⅰ・Ⅱ両学期に報告者が継続して担当している「イスラム教の世界」（世界教養プログラム応用科目）について、授業概要、工夫している点、反省点、今後の課題に分け、報告を行いたい。

2. 授業概要

本科目は、宗教としてのイスラム教を包括的に学ぶことを目的としている。衣食住などの文化や地域的展開よりも、確立した思想・宗教体系としてのイスラム教を学ぶことに重点を置いている。

イスラム教の根本的な世界観と、宗教としての構造、特徴的な宗教実践について知ることを学習目標として定めている。

準備学習として、「授業内容を改めてまとめ（30分）、自分なりの疑問点がどこにあるのかをまとめ（30分）、自分が興味をもった分野の参考文献を読む（120分）」ことをシラバスで指示している。

2.1 テーマ設定

本科目の十五回分の授業テーマは次の通りである。

[2020年度 I 期の例]

第 1 回	授業題目：オリエンテーション／イスラム教の成立について 内容：授業前半で、授業概要や評価方法の説明を行い、後半で、西暦七世紀にイスラム教が成立した過程を簡単に説明する。
第 2 回	授業題目：中東のイスラム諸国 内容：イスラム教圏として知られる「中東」について学ぶ。また、アラブ首長国連邦、トルコ、モロッコを例に、「中東」の中にも多様な国・地域が存在することを知る。
第 3 回	授業題目：アラビア文明とアラビア科学 内容：アラビア半島にイスラム教が発生した後、アラブ人は広大な領土を征服し、一大文明を築き上げた。このアラビア文明の特徴と、その中で開花した諸科学について知る。
第 4 回	授業題目：イスラム教超概論 内容：イスラム教の根本教義や、最も基本的な特徴を押さえる。
第 5 回	授業題目：ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の系譜 内容：イスラム教を、「姉妹宗教」と呼ばれるユダヤ教とキリスト教と比較し、三宗教の系譜を学ぶ。
第 6 回	授業題目：「宗教儀礼」とモスク 内容：イスラム教の儀礼的な宗教実践を知るとともに、礼拝施設であるモスクの特徴を学ぶ。
第 7 回	授業題目：クルアーンとハディース 内容：イスラム教の教義を定める典拠となる、聖典『クルアーン』と、ムハンマドの言行を伝える伝承＝ハディースの意味を知る。
第 8 回	授業題目：ウラマー 内容：イスラム教の学者＝ウラマーについて学ぶ。ウラマーとは何をする人で、他宗教における「聖職者」とはどこが違うのかを知る。
第 9 回	授業題目：イスラム法 内容：イスラム教徒の行為規範であるイスラム法の基本構造を学ぶ。
第10回	授業題目：スーフィズム 内容：イスラム神秘主義の潮流であるスーフィズムについて知る。
第11回	授業題目：シーア派 内容：イスラム教の第二の宗派であるシーア派の起源と特徴を学ぶ。
第12回	授業題目：スンナ派 内容：イスラム教の最大宗派であるスンナ派について学ぶ。
第13回	授業題目：イスラム教と女性 内容：イスラム教における女性の位置づけについて学ぶ。
第14回	授業題目：今後の学習の進め方 内容：今後、イスラム教に関わる様々な問題を学ぶための論点を確認する。
第15回	試験とまとめ

これらのテーマを設定するにあたり、次の二点を考慮している。

- ① 世界教養プログラム〈応用科目〉一覧表（系列表）における位置づけ
- ② 内容が重複する可能性のある、他の科目とのすみわけ

- ① 「世界教養プログラム〈応用科目〉一覧表（系列表）における位置づけ」について：

世界教養プログラム〈応用科目〉の全七二科目は、「人文分野」「学際分野」「社会分野」の三つに分類され、各々の分野はさらに四つの系列に分かれている。

「イスラム教の世界」は、「人文分野」の中の「宗教と社会」という系列に分類されている。この「宗教と社会」の系列には、「イスラム教の世界」のほかに、「キリスト教の世界」「仏教・儒教の世界」「比較宗教論」などの科目が設置されており、諸宗教を比較する視点から勉強を進めることが可能性として想定されていることがわかる。

したがって本科目では、他宗教と比較研究をおこなう可能性を考慮して一部の授業テーマを設定し、講義の中でもその点を考慮した解説を行っている。

たとえば、イスラム教の聖典である「クルアーン」について解説する回では、イスラム教以外の宗教の啓典——たとえば仏典や聖書——との形式的・内容的な異同に言及しながら授業を進めている。あるいは、イスラム教の学者「ウラマー」について解説する回では、他宗教における「聖職者」との相違が存在することに注意を促している。

- ② 「内容が重複する可能性のある、他の科目とのすみわけ」について：

世界教養プログラム〈応用科目〉の全七二科目、あるいはその他の科目の中には、本科目と多少内容の重複する可能性のある科目が存在する。たとえば、同じく WLAP 応用科目である「現代イスラム」・「西アジア・アフリカ文化 A/B」や、現代国際学部で開講されている「中東アフリカ研究」などである。

これらの科目との内容的重複を避けるために、本科目においては、中東

地域やアフリカ北部（いずれも、イスラム教徒が多数派の地域）の地域文化、衣食住などの話題、および、これらの地域における現代の政治情勢の話題は極力避け、宗教としてのイスラム教を学ぶことを主眼に置いている。

なお、十五回分の授業テーマは毎年少しずつ変化している。2016年度は以下の通りであった。

[2016年度Ⅰ期の授業テーマ]

1. オリエンテーション
2. イスラームの全体構造
3. 根本的世界観Ⅰ：「神」観
4. 根本的世界観Ⅱ：「世界」観
5. 宗教としての特徴と構造Ⅰ：六信／救済論
6. 宗教としての特徴と構造Ⅱ：クルアーンとハディース
7. 宗教としての特徴と構造Ⅲ：宗教権威と解釈の構造
8. 信徒の生活Ⅰ：五行、二大祭
9. 信徒の生活Ⅱ：イスラーム法
10. 信徒の生活Ⅲ：イスラームの霊性
11. ゲストスピーカーのおはなし
12. イスラームの現代Ⅰ：近現代の新しい思想・運動
13. イスラームの現代Ⅱ：被害者としてのムスリム
14. イスラーム関連事項の学習ガイド&質疑応答・議論
15. 試験

毎学期終了後に、授業内容に微修正を加え、現在に至っている。

2.2 レベル設定

本学には、宗教学、あるいは中東地域研究を専門とする学科やコースは存在しない。そのため、本科目の受講生は、宗教学の素養やイスラム教圏についての背景知識に乏しいことが前提とされる。

したがって、イスラム教に関わる過度に専門的・個別的な領域に深入りすることは適当ではないと考えている。あくまで、受講生各人の関心のある領域の学習を補助するための知識を得る科目となることを目指し、講義のレベルを調節している。

2.3 授業形式

報告者が講義を行う形式をとっており、フィールドワーク・グループワーク・反転授業・アクティブラーニングなどは取り入れていない。

毎回の授業で紙の資料を配布し、パワーポイントにそって話を進めている。教科書は使用していない（2019年度現在）。

2.4 評価方法

第15回目の授業時に行なう授業内試験（100%）によって評点を出している。これ以外の要素は勘案していない（もちろん、大学の規則通り、欠席数が6回以上の受講生はF判定としている）。

既述の通り、本科目の目的は、イスラム教の専門的知識を深めることではなく、本人が主に学びたい領域を補助する知識・教養を得ることにある。そのため、授業内容の一部を把握していれば対応可能なレポートではなく、14回の授業内容をまんべんなく復習してもらうために、試験形式を採用している。

試験では、4択の選択問題30個弱と、記述式の質問を1つ設けている（2019年度）。

基本的には選択問題の部分のみを勘案し、正解数の多い上位30パーセント程度の受講生にA評価を付けている。ただし、正解数が同じ学生が多く、A評価の学生を3割前後に揃えることが難しい場合には、記述式の回答を考慮し、A評価とB評価の境界線上に分布する学生の中から、A評価に繰り上げる学生を選ぶ方法をとっている。

試験の難易度については、「4. 反省点と試行錯誤」で後述する。

3. 工夫

本科目の運営方法には、特筆するような際立った特徴はないと考えているが、あえて記せば、授業で配布するレジュメの作成と、試験の際のカンニング防止対策には多少気を配っている。

3.1 レジュメ

レジュメに関しては、たとえば以下のような工夫をしている。

- ① レジュメの分量をなるべく少なくするよう努めている。本プログラムは専門科目ではないため、大量の資料を配布しても、それらを積極的に活用する（たとえば、それらを読み込んで復習する）ことを学生に期待することはできない。資料の枚数を増やすと、整理が難しくなるなどし、勉強するどころか反対に自宅学習に支障をきたす可能性さえある。2019年度現在は、第1回目から第14回目までのすべての授業で、配布するレジュメの枚数をA3用紙1枚か2枚に抑えている。
- ② 学生の資料整理の便宜のために、すべての資料の大きさをA3で統一している。
- ③ 資料に使用する文字は、なるべくユニバーサルデザインのフォントを使用している。
- ④ レジュメ上に、メモをとるための一定の余白を確保している。特にメモをとって欲しい箇所には、メモを取ることを促すために、下線を用いた「メモ欄」をレジュメ上に設けている。
- ⑤ 一つの話題についての記述が複数の紙にまたがることは避けている。さらに、可能であれば、1枚のレジュメ上でも、左段と右段でセクションがまたがらないようにしている。
- ⑥ パワーポイントのスライドの内容は、レジュメに沿ったものになっている。レジュメとスライドの内容や話の順番がずれてしまうと、受講生が話についてくるのが難しくなるためである。

〔レジメの例〕



これまでの授業アンケートでは、「レジメが見やすく良かった」という感想を多くもらっている。

3.2 カンニング対策

報告者は、試験に際するカンニングを防止するために、以下のような措置をほどこしている。

- ① 試験前に、筆記具と消しゴムを筆箱から取り出し、筆箱はカバンの中にしてしまうよう指示する。
- ② 試験前に、各自のカバンの口をしっかりと閉じ、口が開いた状態にならないよう指示する。また、試験中に、口の開いたカバンから授業に関連するプリントなどが見える状態が確認された場合は、カンニング行為とみなすとあらかじめ説明する。
- ③ 試験前に、各受講生が座る机の収納口を空にするよう指示する。収納口に本人の所有物ではないものが入っている場合も、すべて出させて、報告

者が回収する。また、試験中に机の収納口にプリントなどが見つかった場合は、そのプリントを実際に見ている現場を確認できなかったとしても、カンニング行為とみなすとあらかじめ説明する。

- ④ 以上のことは、口頭で指示・説明するだけでなく、パワーポイントのスライドに投影し、文字によっても明確に指示する。
- ⑤ カンニング行為は大学に報告され、大学がしかるべき処分を行なうことを、試験前に説明する。
- ⑥ 試験実施中は、複数回歩いて巡回し、受講生がカンニング行為を行っていないかを監督する。また、巡回していない際も、教卓から受講生を監督する。監督の際は、上記の通り、机の収納口に物が入っていないか、カバン口が開いていないかを確認することはもちろん、学生が手元で不審な動きをしていないかに注意する。シャープペンシルの透明なグリップ部分の内部にカンニングペーパーを巻きつけておいたり、カンニング用のメモを手のひらに直接書き込む学生がいるため、細かな手の動きに用心する。机の上にカンニング用のメモをあらかじめ書き込んでおくカンニングの方法もあるため、より確実なカンニング防止のためには、試験前または試験中に、机上に何らかの書き込みをしていないかどうかを確認したいと考えているが、作業に手間がかかるため、現時点では実施には至っていない（机を確認するだけであればさほどの時間はかからないが、机の上の全ての文字を消しゴムで消す作業と、その確認作業が煩雑になると思われる）。

4. 反省点と試行錯誤

4.1 初年度における試験レベル設定のミス

本科目を担当した初年度において、第15回目に実施する期末試験のレベルを著しく低く設定してしまった。これは、本科目運営過程での最も大きな反省点である。

その学期に実施した試験では、多くの受講生の正解率が8割から9割に達し、全問正解の学生も想定より多く出てしまった。そのため、「A評価3割」の方針にできるだけ沿うために、正解率が9割前後の学生に対してB評価を

つけざるをえなかった。

また、この年度の試験の難易度が低かったことが原因で、本科目がいわゆる「楽単」であるとの評価が一部の学生の間に広まってしまった。その結果、翌年度の受講希望者が倍増し、授業内容を目的に受講を希望する学生が抽選落ちするなど、残念な結果を招いた。

次の学期以降、試験の難易度を調節し、現在は、全問正解の受講生が各期に0～3名程度しか出ない難易度を保っている¹。そのため、「楽単」であるとの印象は現在では或る程度薄まってきていると考えている。

4.2 「不適切」な動画放映のミス

一時期、イラク戦争についてのドキュメンタリー映画を授業内で視聴していたことがある。この映画は、日本人ジャーナリストによって作成されたもので、日本国内流通用の商品のため、さほど「過激な」内容は含まれていない。

しかし、この動画について、一部の受講生から「見たくなかった」との声があった。動画の一部に、空爆による負傷者の血痕や、(鮮明ではないものの) 遺体が写り込む場面があったことが理由である。

本学は、外国語大学という特質上、学生は多少なりとも国際情勢に関心があり、戦争関連の話題にも或る程度耐性があると当初は漠然と考えていたが、実際は、国際情勢に関心のある学生は特段多いわけではないこと、また、非日常的な話題に対して繊細な反応を示す学生が多いことを後に理解した。

現在は、当該映画の視聴は自粛している。

4.3 教科書使用の試みと中止

現在、本科目では教科書を採用していないが、2017年度に教科書の使用を試みたことがある。

授業アンケートの結果を見る限りでは、この年度の受講生の満足度は、それ以外の年度の満足度とまったく変わらなかった。むしろ、教科書を使用しない年度よりも積極的な質問が寄せられたような印象も受けた。

しかしながら、教科書に沿って授業を進めた結果、専門的な内容に入ってしまう部分もあったため、専門性の高い内容は避けるとの既述の方針に沿わないと感じられた。

そのため、翌年度からは教科書の使用を自粛し、現在まで教科書未使用での授業運営を続けている。

5. 今後の課題

毎学期の受講申請者数や授業アンケートの内容から推測するに、本科目に対する満足度は低くないと認識している。そのため、以上に記した本科目の基本的な方針は、当面は変更しないつもりでいる。

しかし、課題がまったく無いわけではない。

時折ではあるが、講義の内容を（特に理解が困難である内容ではないにもかかわらず）うまく理解しない受講生がいるという問題については、対策を考えてもよいかもしれない。

もちろん、これは本科目に限らない全学的（全国的？）な課題であろうが、本科目に特有の要素も存在する。たとえば、受講生の中には、極めてナイーブなオリエンタリズム的思考傾向を持ち、講義内容を曲解し（場合によっては、正反対の意味にとり）、自らの信じる、イスラム教圏の「後進性」・「暴力性」と結び付けて「理解」しようと試みる学生がいる。

この問題を簡単に解決する術はない。しかし、少しでもイスラム圏を身近に感じてもらえるように、第2回「中東のイスラム諸国」の授業で、学生が旅行先の候補としやすいUAE・トルコ・モロッコをとりあげるようにしたこと、また、第3回「アラビア文明とアラビア科学」の授業で、かつて、ヨーロッパ文明を凌駕し、これを啓蒙したアラビア文明の「先進性」を紹介するようにしたことは、この対策の一環である。

どのような科目であれ、ステレオタイプ化された理解をする学生がいることは仕方のないことである。学生たちの傾向を見極め、受け入れたうえで、講師側が誤読される可能性を最大限考慮し、想像力を働かせて講義を進めていくしかない。

注

- ¹ 2019年度Ⅰ期の夏季休暇中に、集中講義で本科目が追加開講された。その際も、学期中の授業と同様の形式の試験を第15時限目の授業で実施したが、平均点は、学期中に実施する試験よりもはるかに高く、全問正解の受講生も多かった。推測の範囲を出ないが、学期中は、専攻言語などの学習に時間をとられているため、応用科目の自宅学習がおろそかになっているのではないだろうか。実際、一部の学生から、専攻言語の宿題に忙殺されるため、それ以外の科目の学習に割く時間が無いとの声を聞いたことがある。